

2017年度 修士論文

欧州におけるドイツ人 GK の起用率とその要因

The Proportion of Starting German Goal Keepers in
European Competitions and The Logic

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻 スポーツビジネス研究領域

5016A006-1

伊藤 幹人

研究指導教員： 平田 竹男 教授

目次

第1章	背景	4
第1節	ドイツ国内サッカーの現状	4
第1項	ドイツ代表	4
第2項	ヨーロッパ5大リーグのゴールキーパー構成比	6
第2節	Champions League 優勝回数上位5チーム	7
第3節	筆者の経歴	7
第4節	先行研究	8
第2章	目的	8
第3章	研究手法	8
第1節	欧州におけるドイツ人 GK の起用率	8
第1項	比較対象	8
第2項	期間	9
第3項	分析方法	9
第2節	5大リーグ MVP 比較	10
第3節	インタビュー調査	10
第4章	結果	12
第1節	自国籍 GK レシオ	12
第1項	イタリア	13
第2項	イングランド	13
第3項	スペイン	14
第4項	ドイツ	14
第5項	フランス	14
第2節	ワールドカップ成績と自国籍 GK レシオ	15
第1項	イタリア	15
第2項	イングランド	16
第3項	スペイン	17
第4項	ドイツ	18
第5項	フランス	19
第6項	まとめ	19
第3節	ヨーロッパ5大リーグの MVP	20
第4節	インタビュー調査	21
第5章	考察	22
第1節	ドイツ人 GK の起用率と現状	22
第2節	技術的特徴	23
第3節	技術を継承し広げる仕組みを持つドイツ国内の実態	23
第4節	その他	25
第6章	結論	26
第7章	謝辞	26
第8章	参考文献	27

図表目次

表 1	ワールドカップ成績	4
表 2	FIFA ランキング	5
表 3	自国籍 GK の割合	6
表 4	リーグランキング(2016/1/1-2016/12/31)	6
表 5	CL 優勝回数上位 5 チームの自国籍 GK 割合	7
表 6	賞の主催と期間	10
表 7	落合貴嗣氏の経歴	10
表 8	落合貴嗣氏に対してのインタビュー内容	11
表 9	松本拓也氏の経歴	11
表 10	松本拓也氏に対してのインタビュー内容	11
表 11	CL ベスト 16 先発 GK 数	12
表 12	CL ベスト 16 チームが所属するリーグがある国のチーム数	12
表 13	自国籍 GK レシオ	12
表 14	各国 GK の MVP 選出率	20
表 15	ドイツ人 GK の歴代 MVP	20
表 16	ドイツ代表 GK の変遷と大会成績	25
図 1	自国籍 GK レシオ	13
図 2	イタリアの W 杯成績とレシオ	15
図 3	イングランドの W 杯成績とレシオ	16
図 4	スペインの W 杯成績とレシオ	17
図 5	ドイツの W 杯成績とレシオ	18
図 6	フランスの W 杯成績とレシオ	19

第1章 背景

第1節 ドイツ国内サッカーの現状

第1項 ドイツ代表

表1 ワールドカップ成績

開催年度	開催国	優勝	準優勝	3位
2014年	ブラジル	ドイツ	アルゼンチン	オランダ
2010年	南アフリカ	スペイン	オランダ	ドイツ
2006年	ドイツ	イタリア	フランス	ドイツ
2002年	韓国/日本	ブラジル	ドイツ	トルコ
1998年	フランス	フランス	ブラジル	クロアチア
1994年	アメリカ	ブラジル	イタリア	スウェーデン
1990年	イタリア	西ドイツ	アルゼンチン	イタリア
1986年	メキシコ	アルゼンチン	西ドイツ	フランス
1982年	スペイン	イタリア	西ドイツ	ポーランド
1978年	アルゼンチン	アルゼンチン	オランダ	ブラジル
1974年	西ドイツ	西ドイツ	オランダ	ポーランド
1970年	メキシコ	ブラジル	イタリア	西ドイツ
1966年	イングランド	イングランド	西ドイツ	ポルトガル
1962年	チリ	ブラジル	チェコスロバキア	チリ
1958年	スウェーデン	ブラジル	スウェーデン	フランス
1954年	スイス	西ドイツ	ハンガリー	オーストリア
1950年	ブラジル	ウルグアイ	ブラジル	スウェーデン
1938年	フランス	イタリア	ハンガリー	ブラジル
1934年	イタリア	イタリア	チェコスロバキア	ドイツ
1930年	ウルグアイ	ウルグアイ	アルゼンチン	ユーゴスラビア・アメリカ

表1は、ワールドカップにおける成績を示している。現在までに20大会開催されているが、20大会中12大会3位以内に入賞しており最も好成績を残している国である。優勝回数は4回とブラジルの5回に続き2番目に優勝回数が多い国である。

近年における活躍として、2017年ロシアで行われた各大陸王者によって争われるナショナルチームの国際大会であるコンフェデレーションカップでは、優勝を果たしている。また、2年に1度23歳以下で行われる欧州サッカー連盟(以下UEFA) U-21欧州選手権の

2017 年ポーランド大会において U-21 ドイツ代表は優勝している。同大会ベストイレブンにドイツから 6 名選出されており最多である。2009 年大会も優勝し 2015 年はベスト 4 進出と育成年代においても好成績を残している。育成年代から A 代表に至るまで好成績を残している。

表 2 は、国際サッカー連盟(以下 FIFA) ランキング(2017/10)の 1 位から 20 位を示している。

表 2 FIFA ランキング

Rank	Team	Total Points	Previous Points
1	Germany	1631(1631.05)	1606
2	Brazil	1619(1618.63)	1590
3	Portugal	1446(1446.38)	1386
4	Argentina	1445(1444.69)	1325
5	Belgium	1333(1332.55)	1265
6	Poland	1323(1322.83)	1250
7	France	1226(1226.29)	1208
8	Spain	1218(1217.94)	1184
9	Chile	1173(1173.14)	1195
10	Peru	1160(1159.94)	1103
11	Switzerland	1134(1134.5)	1210
12	England	1116(1115.69)	1056
13	Colombia	1095(1094.89)	1191
14	Wales	1072(1072.45)	1089
15	Italy	1066(1065.65)	1035
16	Mexico	1060(1059.6)	1085
17	Uruguay	1034(1033.91)	1043
18	Croatia	1013(1012.81)	977
19	Denmark	1001(1001.39)	848
20	Netherlands	931(931.21)	819

ブラジルに僅差ではあるが上回り FIFA ランキング 1 位であり、ドイツ代表の活躍が顕著である。

第2項 ヨーロッパ5大リーグのゴールキーパー構成比

ドイツ国内リーグであるブンデスリーガは、UEFA に所属し1部、2部それぞれ18クラブ、3部20クラブの合計56クラブが所属している。観客動員数は、世界第1位のプロサッカーリーグである。健全なリーグ及びクラブ経営は、様々な国の模範とされており日本もJリーグを設立した際はブンデスリーガをモデルにしたとされている。

ヨーロッパ5大リーグ(ドイツ・ブンデスリーガ、イングランド・プレミアリーグ、スペイン・リーガエスパニョーラ、イタリア・セリエA、フランス・リーグアン)の各一部リーグにおける自国籍ゴールキーパー(以下 GK)の割合(2017/10)を出すと表3のようになる。

表3 自国籍 GK の割合

リーグ	国	チーム数	GK数	自国籍GK数	自国籍割合(%)
ブンデス	ドイツ	18	61	44	72
プレミア	イングランド	20	61	19	31
リーガ	スペイン	20	49	31	63
セリエ	イタリア	20	64	44	69
リーグアン	フランス	20	65	46	70

ブンデスリーガにおいて、61人のGKが在籍し、その中でドイツ人GKは44人在籍しており約72%の割合で自国籍リーグにおいてドイツ人GKを起用していることになり、これは、この5ヶ国の中で最も高い割合で自国籍GKを自国籍リーグにおいて起用していることになる。また、表4(出典:IFFHS公式HP)で、ブンデスリーガがリーグランキング4位となっていることから、自国籍GKを起用し且つ高いリーグレベルを保っていることになる。

表4 リーグランキング(2016/1/1-2016/12/31)

順位	リーグ所属国	所属連盟
1	Spain	UEFA
2	Colombia	CONMEBOL
3	France	UEFA
4	Germany	UEFA
5	Argentina	CONMEBOL
6	England	UEFA
7	Brazil	CONMEBOL
8	Italy	UEFA
9	Belgium	UEFA
10	Turkey	UEFA

第2節 Champions League 優勝回数上位 5 チーム

1955/1956-1991/1992 シーズンまで European Champion Clubs Cup と呼ばれ、1996/1997 シーズンから UEFA Champions League (以下 CL) となった UEFA 主催で欧州クラブシーンにおける最も権威ある国際大会である大会において優勝回数上位 5 チーム (55/56-16/17) の自国籍 GK の割合を出すと表 5 のようになる。

表 5 CL 優勝回数上位 5 チームの自国籍 GK 割合

優勝回数上位 5 チーム	国	所属	優勝回数	自国籍先発選手数	自国籍割合(%)	自国籍選手以外の国籍
レアルマドリード	スペイン	リーガエスパニョーラ	12	9	75%	ドイツ・コスタリカ
ACミラン	イタリア	セリエA	7	5	71%	ブラジル
バルセロナ	スペイン	リーガエスパニョーラ	5	4	80%	ドイツ
バイエルン・ミュンヘン	ドイツ	ブンデスリーガ	5	5	100%	
リバプール	イングランド	プレミアリーグ	5	3	60%	ジンバブエ・ポーランド

ドイツ・ブンデスリーガ所属のバイエルン・ミュンヘン (以下バイエルン) は、優勝回数 5 回とバルセロナやリバプールと並び 3 番目に多く、その時の GK は全員ドイツ国籍の GK である。

他 4 チームと比較しても優勝時に自国籍 GK を起用した割合が最も高く、また、優勝回数が一番多いスペイン・リーガエスパニョーラ所属のレアルマドリードや優勝回数が同数のバルセロナは優勝時にドイツ人 GK を起用したケースがあり、ドイツ人 GK が CL において優勝するような強豪チームにおいて多く起用されている。

第3節 筆者の経歴

筆者は、小学生から GK を始め、小中高とナショナルレベルに選出されてきた。その中でオリヴァー・カーンやイェンス・レーマン、マヌエル・ノイヤーなど時代が流れても途切れることなく、幼い頃から常にドイツ人 GK が世界で活躍し目標にしてきた。

そこで筆者は、憧れで目標にしてきた存在をもっと近くで感じ学びたい、そのレベルに近づきたいという強い思いから、大学在籍時に休学し渡独後 2013~2014 シーズンの途中まで元ブンデスリーガ所属であり 1968/69 シーズンはリーグ準優勝を果たした経験がある古豪 Alemannia Aachen という現在は西部レギオナルリーグに所属するチームのツヴァイテスナワチ 2 軍に値するオーバーリーグ (5 部) に GK として所属し、1 軍で練習、1 軍 2 軍

の試合に出場する。この中で、実際にドイツ人 GK のレベルの高さに触れるとともに、ドイツ人 GK は欧州においてどのようなポジションにいるのだろうと疑問に思う。

そこで、筆者はなぜドイツ人 GK が欧州において他国よりも高い割合で起用され、且つ好成績を残せているのだろうかという点を本論文のリサーチクエスションにする。そして、このドイツ国内の実態を見ることで日本にいる GK の将来像を考慮する上で参考になるのではないかという点で研究意義を見出した。

第 4 節 先行研究

PK 時における GK のセービングフォームに焦点をあて動作分析を行った永都(1979)のようなバイオメカニクス研究が多く、またフランスの青少年サッカー育成システムについて調査した松原(2007)や日本の中学・高校年代における GK コーチの必要性を説いた松元(2011)、ドイツ・ブンデスリーガにおけるユース育成の実態を経年比較によって明らかにした三澤(2013)が存在する。以上のことから、欧州におけるドイツ人 GK の起用に焦点をあてた研究は存在しない。

第 2 章 目的

ドイツ人 GK が欧州において他国よりも高い割合で起用されている現状と要因を明らかにする。

第 3 章 研究手法

ドイツ人 GK が多く起用されている現状を明らかにするために、欧州におけるドイツ人 GK の起用率ならびにワールドカップがその活躍に影響しているのかを文献調査し、また GK のドイツ国内でのポジショニングを文献調査する。そして、ドイツ国内の GK に関する実態を調査するために、ドイツの GK 事情に詳しい 2 名にインタビュー調査を行う。

第 1 節 欧州におけるドイツ人 GK の起用率

第 1 項 比較対象

対象は、5 大リーグ(最強の教科書第 2 版 39 ページから抜粋)であるドイツ・ブンデスリーガ、イタリア・セリエ A、スペイン・リーガエスパニョーラ、イングランド・プレミアリーグ、フランス・リーグアンから選出された CL ベスト 16 チームにおける先発 GK 数とその国籍、CL ベスト 16 チームが所属するリーグがある国のチーム数、5 大リーグを有する国のワールドカップ成績とする。

第2項 期間

対象期間は、1996/1997 シーズンまで CL における大会方式が各国リーグ 1 位のチームのみが争う大会であったため調査データの変化が出にくく、1997/1998 シーズンから出場枠が拡大され GK の人数や国籍、チーム数が増加しデータに変化が生ずるため、1997/1998-2017/2018 の 20 年間とした。そして、1998 年から 2014 年までのワールドカップ成績によっての変化を見るため 4 年毎に集計する。なので、1997/1998 は独立することになる。

第3項 分析方法

欧州内の比較のために、CL ベスト 16 チームにおいて自国籍の GK を先発 GK として起用しているかとその中でドイツ人 GK が他国よりも多く起用されている現状を明らかにするために、自国籍 GK 数と国籍とそのチームが所属するリーグがある国のチーム数の比率を算出し、これを自国籍 GK レシオ(以下レシオ)とする。

算出方法は以下の順序で行う。

best16 チームの先発 GK の国籍と人数を集計

↓

best16 チームが所属するリーグがある国のチーム数を集計

(例バイエルン→ブンデスリーガ→ドイツ)

↓

人数 / 国 = 自国籍 GK レシオ

また、ワールドカップ後の変化を見るために 4 年毎に括り、推移をグラフ化し、ワールドカップ成績との混合グラフも作成する。(CL は年をまたぎ試合があるので 1997/1998 のようにシーズンで表記するのが一般的だが、表や図の中では分かりやすくするために 1997/1998 という表記ではなく 1997 のように単年で表している。)

第2節 5大リーグ MVP 比較

対象期間と賞の主催は、各国によって異なっておりそれを以下のようにまとめた上で、各国リーグの年間最優秀選手における GK の人数及び割合を算出する。

表 6 賞の主催と期間

	賞の名前	賞の期間	主催
ドイツ	Fußballer des Jahres	57	専門誌キッカー・ドイツスポーツジャーナリスト協会
スペイン	Don Balón Award	35	週刊誌ドン・パロン
イタリア	Gran Galà del Calcio(Oscar del Calcio)	21	イタリアサッカー選手協会
イングランド	PFA Players' Player of the Year	43	PFA(プロフェッショナル・フットボールアソシエーション)
フランス	Trophées UNFP du football	22	UNFP(全国プロサッカー選手連合)

第3節 インタビュー調査

対象者は、ドイツ国内の GK に関する実態を調査するために、ドイツと日本で GK コーチの経験があり、コーチとしての経験が豊富な落合貴嗣氏とドイツで選手としての経験があり、現在 J1 チームで GK コーチをやっている松本拓也氏に両者の立場に合わせインタビューを行った。対象者の経歴とインタビュー内容を以下にまとめた。

表 7 落合貴嗣氏の経歴

対象者	落合貴嗣 氏
コーチ歴	～2012:日本の高校サッカー部やジュニアユースで GK コーチ
	2012～2014:S.C.ブリュール トップチーム GK コーチ
	2014～現在:S.C.フォルトゥナ・ケルン U19/15/14/11 GK コーチ

表 8 落合貴嗣氏に対してのインタビュー内容

質問①	トレーニングするにあたってドイツには良い環境があるか
質問②	ドイツの人材育成に関して
質問③	ドイツ人 GK の特徴は何か

表 9 松本拓也氏の経歴

対象者	松本拓也氏
選手歴	1998:柏レイソルユース
	1998-1999:ウンターハッヒング ユース (ドイツ)
	1999-2000:ウンターハッヒング アマチュア (ドイツ)
コーチ歴	2000-2006:川崎フロンターレユース GK コーチ
	2007-2011:柏レイソル U-18 GK コーチ
	2011-2014:柏レイソルアカデミー GK コーチ
	2015～現在:柏レイソルトップチーム GK コーチ

表 10 松本拓也氏に対してのインタビュー内容

質問①	ドイツ人 GK コーチに関して
質問②	ドイツでのトレーニングで特徴的なことは
質問③	なぜドイツでは優秀な選手が継続して輩出できているのか
質問④	ドイツでは GK を育成しやすい環境が整っているのか

第4章 結果

第1節 自国籍 GK レシオ

1997/1998 年と 1998/1999-2017/2018 年の 4 年毎における CL ベスト 16 チームの先発 GK 数は表 11 のとおりとなった。

また、同様の CL ベスト 16 チームが所属するリーグがある国のチーム数は表 12 となった。そして、先発 GK 数をチーム数で除した CL ベスト 16 チーム自国籍 GK レシオは表 13、その推移を図 1 の折れ線グラフで表した。

表 11 CL ベスト 16 先発 GK 数

	1997	1998-2001	2002-2005	2006-2009	2010-2013	2014-2017
イタリア	1	7	11	3	8	5
イングランド	0	3	0	0	2	1
スペイン	0	6	10	16	13	10
ドイツ	4	7	10	7	11	16
フランス	1	7	4	6	4	2

表 12 CL ベスト 16 チームが所属するリーグがある国のチーム数

	1997	1998-2001	2002-2005	2006-2009	2010-2013	2014-2017
イタリア	1	8	12	13	9	7
イングランド	1	9	13	15	12	13
スペイン	1	10	13	14	12	13
ドイツ	3	7	9	5	11	10
フランス	0	5	3	5	6	5

表 13 自国籍 GK レシオ

	1997	1998-2001	2002-2005	2006-2009	2010-2013	2014-2017
イタリア	1	0.88	0.92	0.23	0.89	0.71
イングランド	0	0.33	0	0	0.17	0.08
スペイン	0	0.6	0.77	1.14	1.08	0.77
ドイツ	1.33	1	1.11	1.4	1	1.6
フランス	0	1.4	1.33	1.2	0.67	0.4

図 1 は表 13 をグラフにしたものである。

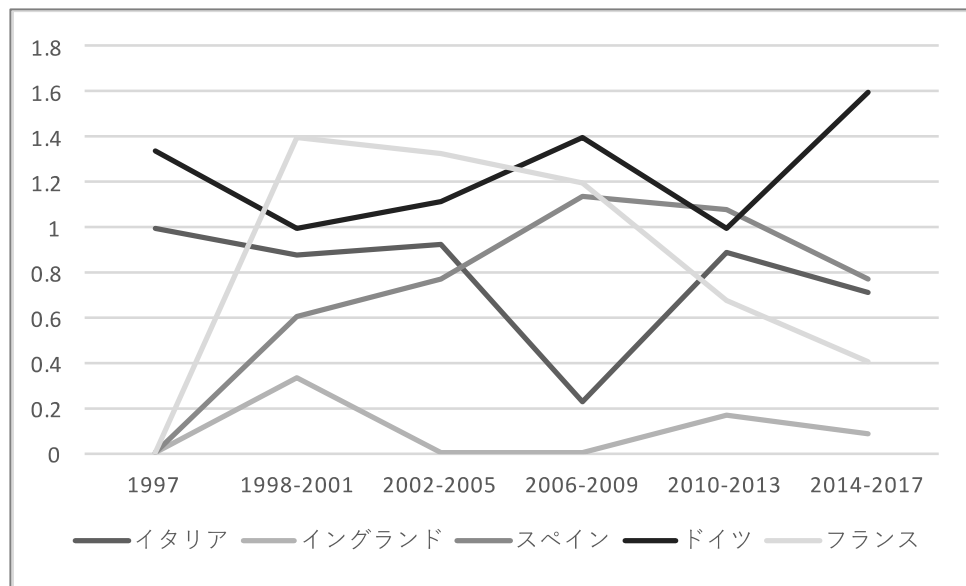


図1 自国籍 GK レシオ

第1項 イタリア

イタリアは、自国のチームがCL ベスト 16 に入っているのにも関わらず、1997 年以降レシオ 1 を常に下回っており上昇下降を繰り返し安定しておらず、イタリア国籍の GK が少ない事を示している。2006-2009 年に関して、チーム数は 13 と多いのだが、GK 数は 3 と少なく自国チームは出ているのだが、自国籍 GK が出ていないことが顕著である。

第2項 イングランド

プレミアリーグ所属のチームにおいてベスト 16 に入るような強豪チームは多いのだが自国籍 GK をほとんど起用していない。全期間においてレシオが 1 を常に下回っており、1997/1998, 2002/2003-2005/2006, 2006/2007-2009/2010 においてレシオが 0 であり、その中でも 1997/1998, 2002/2003-2005/2006, 2006/2007-2009/2010 は、表 12 から分かるように 1997/1998 に 1, 2002/2003-2005/2006 に 13, 2006/2007-2009/2010 に 15 とプレミアリーグからベスト 16 に入っているチームはあるが、自国籍 GK を起用していないということが顕著である。

第3項 スペイン

2006/2007-2009/2010 には GK 数 16 と最も多い人数を CL ベスト 16 に輩出しレシオ 1.14 と高い数値を出しており、近年また下降傾向にある。しかしながら、1998/1999-2001/2002 から 2014/2015-2017/2018 のチーム数は 10~14 と多く、同期間 GK 数も 6~16 と多い、これはリーガエスパニョーラから安定的にチームを CL ベスト 16 に輩出し、スペイン国籍 GK も CL ベスト 16 内に多いということである。

第4項 ドイツ

レシオは、全期間において 1 以上と、安定した数値となっている。チーム数においては、1998/1999-2001/2002~2006/2007-2009/2010 の期間で、イタリア、イングランド、スペインと比しても決して多くないが、GK 数ではコンスタントな数値を記録している。これは、CL ベスト 16 においてドイツ・ブンデスリーガ所属チーム以外のチームにおいて多くのドイツ人 GK が活躍しているということになる。さらに 2013/2014 からフランス、イタリア、スペイン、イングランドの 4 ヶ国は下降しているのにも関わらずドイツのみ上昇している。

第5項 フランス

1997/1998 から 2014/2015-2017/2018 の全ての期間においてチーム数は 0~6 とこの 5 ヶ国の中では最も少ない。フランスワールドカップが行われた 1998 年を含む 1998/1999-2001/2002 に 1.4 を記録してから下降し、2014/2015-2017/2018 年には 0.4 となる。

第2節 ワールドカップ成績と自国籍 GK レシオ

図 2, 3, 4, 5, 6 は各国のワールドカップの成績とレシオの複合グラフである。

(オレンジ: ワールドカップ成績 ブルー: レシオ)

第1項 イタリア

2002 年にベスト 8 からベスト 16 に下がったのに対してレシオは 0.87 から 0.91 に上昇している。2006 年ワールドカップ優勝した時にレシオは最低値の約 0.2 を記録し、2010 年ベスト 32 と前大会から成績は落ちたのに対してレシオは約 0.7 上昇している。

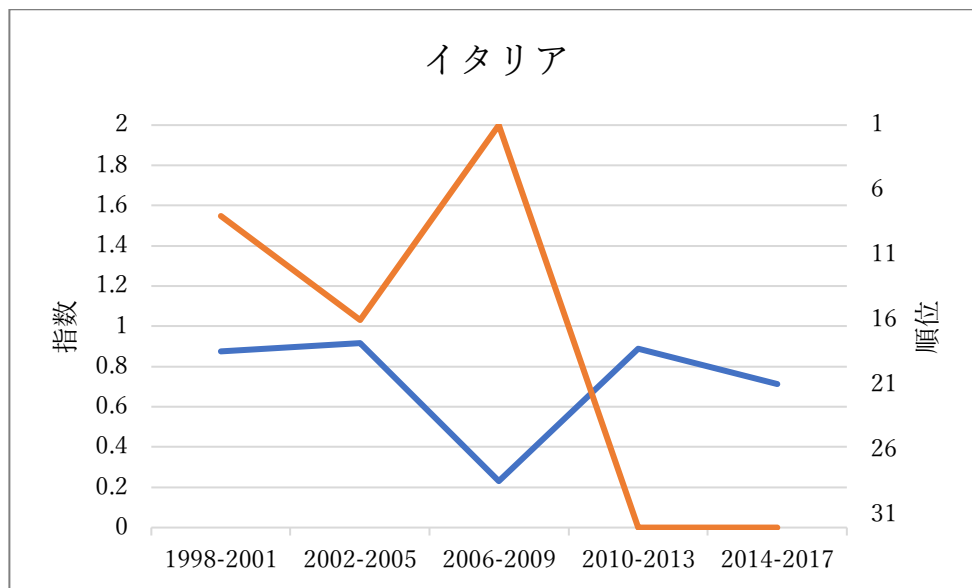


図2 イタリアのW杯成績とレシオ

第2項 イングランド

1998年にベスト16入りした時にはレシオが0から0.33と上昇しワールドカップで成績を上げた時にレシオは上昇しているが、2002年にベスト8入りした時レシオは0に下がりワールドカップ成績が上がったのに対してレシオが下降している。

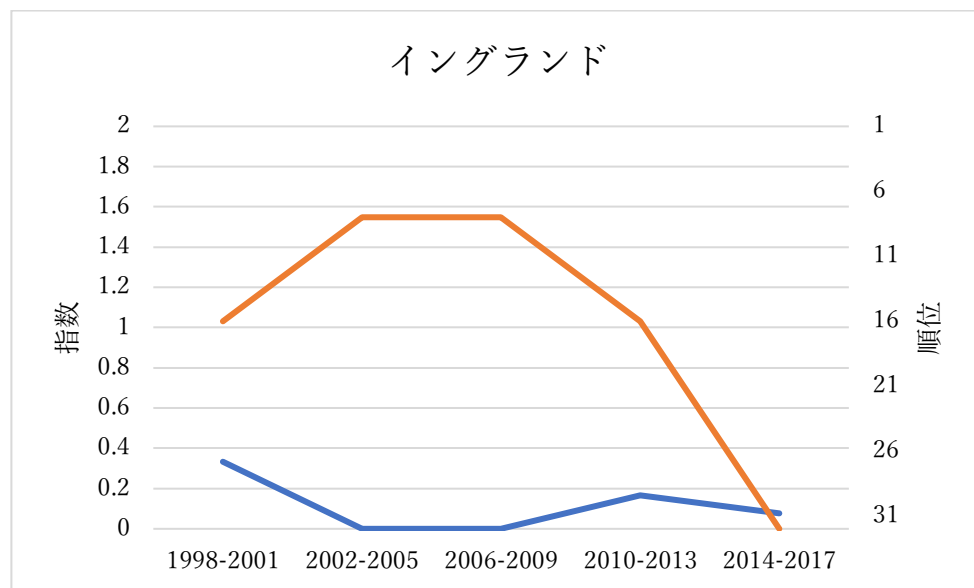


図3 イングランドのW杯成績とレシオ

第3項 スペイン

ワールドカップ成績は、上昇下降の繰り返りで2大会連続ベスト8に入ったことがなく、代表としての結果は不安定である。2006年にベスト8からベスト16に下がったのに対してレシオは0.76から1.14に上昇している。前大会のベスト16から2010年にワールドカップ優勝した時にレシオは1.14から1.08に下降している。

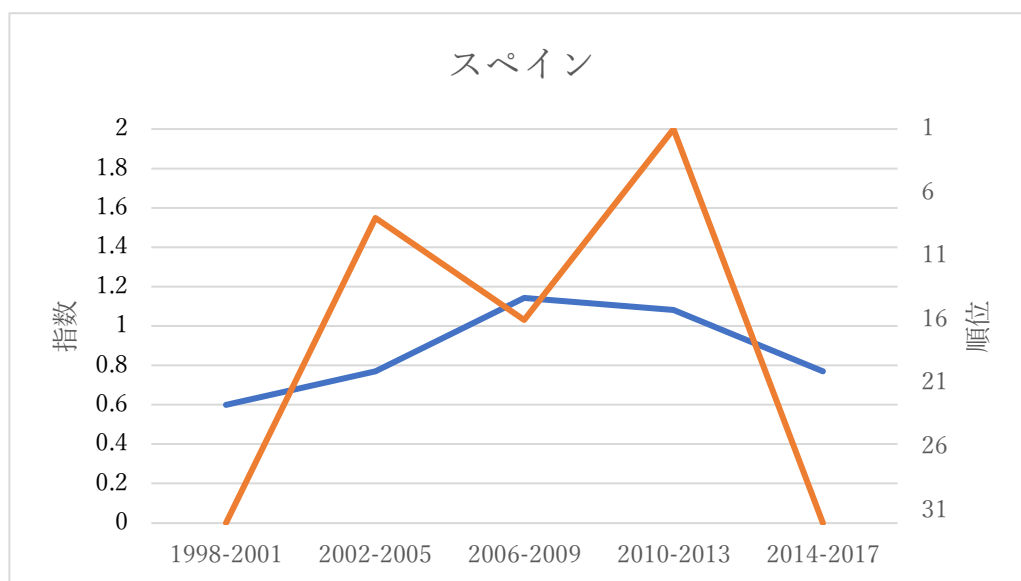


図4 スペインのW杯成績とレシオ

第4項 ドイツ

ワールドカップ 1988 年から 2014 年にかけてベスト 8 以上を保っており、この 5 か国のうち最も好成績を残している国である。2014 年に優勝した時には、レシオは 1 から 1.6 へと上昇している。2006 年と 2010 年と成績は 3 位と変わってないのにも関わらずレシオは 1.4 から 1 に下がっている。

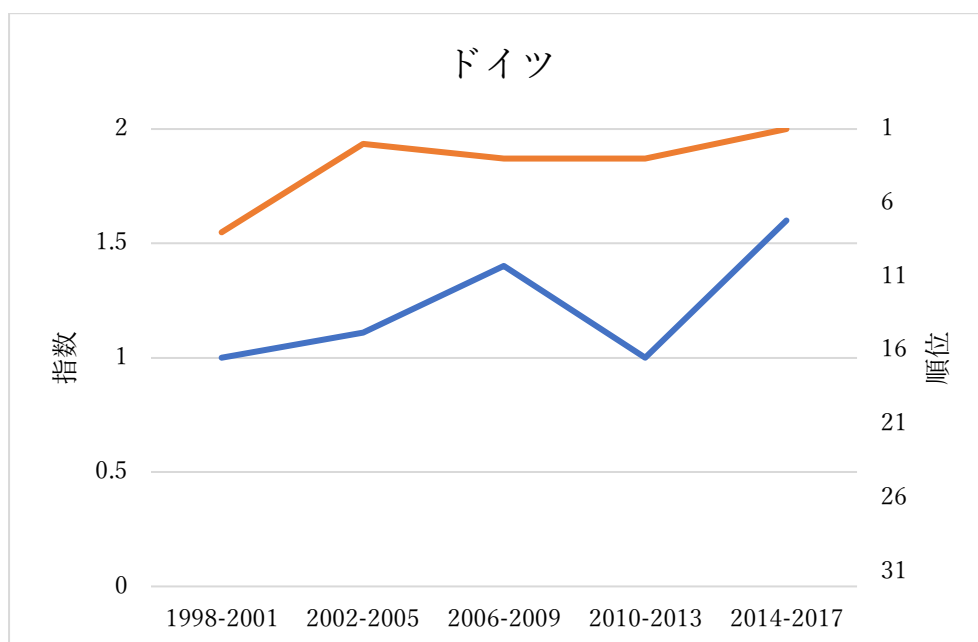


図5 ドイツの W 杯成績とレシオ

第5項 フランス

1998年フランスワールドカップで優勝したフランスは、2002年ベスト32, 2006年準優勝, 2010年ベスト32と上昇下降の振り幅が一番大きいことがわかる。レシオは、ワールドカップで好成績を残した年やベスト32に入らなかった年に関係なく下降している。

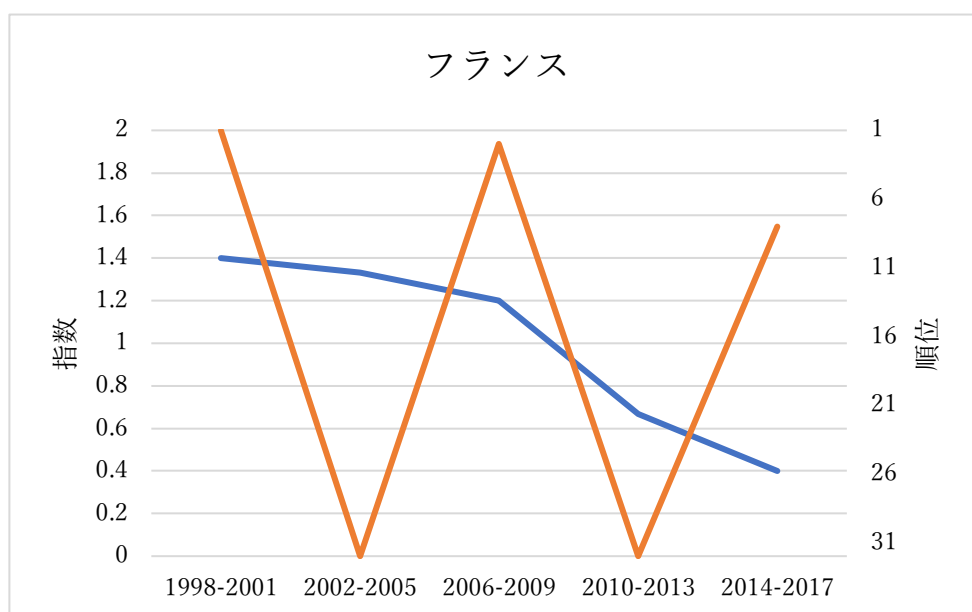


図6 フランスのW杯成績とレシオ

第6項 まとめ

ワールドカップ成績とレシオとの間で関連性はなく、世界最大であるサッカーの大会において好成績を残しても、残さなくてもレシオに大きな影響を与えるということはないと言える。

第3節 ヨーロッパ5大リーグのMVP

表14は、ヨーロッパ5大リーグの最優秀選手賞におけるGKの選出率を表している。

表14 各国GKのMVP選出率

	選出GK数(人)	賞の期間(年)	割合(%)
ドイツ	11	57	19
スペイン	3	35	9
イタリア	1	21	5
イングランド	2	43	5
フランス	0	22	0

ドイツ・ブンデスリーガにおいて、約19%の割合でGKがMVPに選出されており、およそ10年に2人のペースでGKが最優秀選手に選ばれていた。これは、他4ヶ国と比較して最もGKがMVPに選ばれているリーグということになる。

表15 ドイツ人GKの歴代MVP

1965	ハンス・チルコフスキ
1975	ゼップ・マイヤー
1977	ゼップ・マイヤー
1978	ゼップ・マイヤー
1984	ハラルト・シューマツハー
1986	ハラルト・シューマツハー
1993	アンドレアス・ケプケ
2000	オリヴァー・カーン
2001	オリヴァー・カーン
2011	マヌエル・ノイアー
2014	マヌエル・ノイアー

表15は、57年間に選ばれたドイツ人GKの歴代MVPである。

ゼップ・マイヤー、ハラルト・シューマッハー、オリヴァー・カーン、マヌエル・ノイヤーは複数回選出されており人物の偏りが見られる。しかしながら選出年度において満遍なく選出されていることがわかった。

第4節 インタビュー調査

今回実施したインタビュー調査については下記のような回答が得られた。

1) 落合氏

ドイツは、グラウンドの多くが土ではなく芝で、GKのトレーニングメニューが豊富でGKをやりたいと思える環境が整っている。また、ジュニアから大人までが1つのクラブで活動しているので、コミュニケーションが頻繁にとれ、学べる環境が整っている。

人材育成の面は、タレントを見つけた上でその選手を育成していくという点は、日本とあまり変わらないと思う。そして、ジュニアのGKトレーニングでは、スキル向上を目的とするのではなく単純にGKというポジションは楽しいポジションだということを認識させるよう努力している。まずは、GKが楽しいポジションだということを認識してもらうことが大切である。

ドイツ人GKの特徴は、中距離から撃たれたグラウンダーのシュートに対して足を伸ばしてブロッキングをするプレーが特徴的であり、イタリアやスペイン人はあまりしない印象がある。

2) 松本氏

ドイツには、GKトレーニングメニューが豊富にある。

その中には、実践向きか分からないが楽しく面白いメニューも豊富である。

これは、”GKは楽しいポジションなのだ”、”GKは面白いのだ”というきっかけ作りにも役立っている。

そして、ドイツでは人工芝や天然芝でトレーニングすることが容易である。

ただし、天然芝の場合、その気候等の環境から湿ったグラウンドが多く存在する。ところが、足腰が安定していないと滑ってしまうため足腰の強化になり、またデコボコした芝でボールを扱わなくてはならずボールの扱いが上達するという効果も産んでいる。

そして、その数多くあるメニューの中には、手ではなく足でシュートを止めるものも多く存在する。表15のブンデスリーガMVPで選出されているようなオリヴァー・カーンやマヌエル・ノイヤーが、試合においてグラウンダーのシュートや1対1の場面で手ではな

く足を使うシーンが多くあり、それが影響しドイツでは現在ほとんどのチームが足でシュートを止めるトレーニングを取り入れている。しかし、ロールモデルのような選手がやっているからという単純な理由でそのトレーニングを行なっているわけではなく、手よりも足の方がグラウンダーのシュートや1対1の際に手よりも足の方が素早く出すことができるという点で理にかなっているという、しっかりとした理由があるからである。さらに、ドイツには憧れになるような選手が常に存在している。常にという部分が非常に重要で途切れることなくドイツ人 GK はワールドカップやチャンピオンズリーグといった国際大会やブンデスリーグにおいて活躍し、その時代その時代にロールモデルとなるような選手が必ずいるということが重要で目指すべきところを作るのは育成面において重要なことである。私がコーチをしている、柏レイソルでは、中学時代から各年代の代表に選出され 2017 年日本代表招集選手で 2017 年 J リーグベストイレブンに選出された中村航輔という GK が所属しており、2016 年-2017 年シーズンに期限付き移籍から柏レイソルに戻って来て活躍した。その活躍の影響か、ジュニアチームに入るためのセレクションの GK 数は 2016 年 30 人程度だったものが、2017 年には 50 人程度に増えた。また、柏レイソルはジュニアからトップまで一貫した育成方針をとっており、ジュニアやユースの選手は中村選手と接触できる場面が多々あるということで、身近にいる日本のトップ選手から学べる環境が整っており、中村だけではなく U-15, 16, 18 日本代表 GK (2017 年招集選手) に柏レイソルの育成年代から選出されている。まさにドイツのような状況が作れたと感じている。

第5章 考察

第1節 ドイツ人 GK の起用率と現状

1997/1998 から CL ベスト 16 において他 4 国よりもドイツ人 GK が最も多く起用されており、またワールドカップ成績によってレシオが影響されないことが分かったが、混合グラフにおいてドイツだけを見るとワールドカップ成績も良く安定しており、CL ベスト 16 におけるレシオも 1 以上を保ち安定していることからワールドカップや CL といった大きな舞台にはドイツ人 GK が多く存在すると考えられる。そして、1965 年から GK が安定的に MVP に選出され必然的にドイツでは GK に注目が行くと推測される。つまり、ロールモデルが明確になり、目指す上でのモチベーションが生まれると考えられる。

なぜドイツ人 GK が、CL ベスト 16 において他国よりも起用される現状を作り出し、国内において存在感を示すようになったのだろうか。

第2節 技術的特徴

松本氏のインタビューから、ブンデスリーガ MVP に選ばれるようなカーンやノイヤーといったいわゆるロールモデルと呼ばれる GK が先駆けとなり、他の GK が手で止めるようなシュートを足で止めており、ドイツの他の GK や GK コーチは足で止めるような型にはまらない止め方に注目するようになり、現在では多くのチームがトレーニングメニューに取り入れていることから、ドイツはカーンやノイヤーに代表される足でのシュートストップという新しい技術を取り入れ、確立していると言える。これは、近時におけるノイヤーのディフェンダーの背後のスペースを埋めるような戦術も同様であると言えるのではないだろうか。また、実際に筆者がドイツでトレーニングをする際も、足を使ってシュートを止めるメニューが豊富だったことを実感し、試合でも大いに活用できた。このように、従来では確立されていないものを確立するような動きが今のドイツ人 GK の欧州における起用率の高さに繋がっているのではないだろうか。また、実際に柏レイソルの GK トレーニングを見学した際にも、足を使ってシュートを止めるメニューが豊富であった。このトレーニングが中村選手を J リーグ MVP (2017) にさせた一つの要因ではないだろうか。そして、このトレーニングを柏レイソルに持ち込めたのは、GK コーチのドイツにおける GK 経験が大きいことが推し量られる。

第3節 技術を継承し広げる仕組みを持つドイツ国内の実態

インタビュー回答をまとめると、『ジュニアから大人まで1つのクラブで活躍しておりコミュニケーションが頻繁にとれ学ぶ環境が整っている。ドイツには憧れになるような選手が常に存在している。常にという部分が非常に重要で途切れることなくドイツ人 GK は様々な国際大会やブンデスリーグにおいて活躍し、その時代その時代にロールモデルとなるような選手が必ずいるということが重要で目指すべきところを作るのは育成面において重要なことである。』

と述べており、ドイツではクラブ内で選手同士の距離感が近くジュニアの選手は年上の選手と一緒にトレーニングを行ったり見たりして学ぶことやコミュニケーションをとることなどが容易にできる環境が整っている。また、ドイツ国内で見ても自国リーグの MVP に GK が時代に偏りがなく選出されており、優秀な選手が国内で活躍し、その存在を近くに感じることができる。これは、ドイツ国内で GK をしている子供達にとってクラブ内や国内に、ロールモデルとなるような目指すべき選手がいるということになり、GK の育成面において良い環境が整っていると推察される。

また、育成面において良い環境を作り出し、GK の技術に普遍性を持たせる上で、DFB (ドイツサッカー協会) としての取り組みが欠かせないものである。DFB 公式 HP にある TALENTFÖRDERUNG (タレント育成プログラム) によると、DFB が主体となりドイツ全土を網羅し Stuetzpunkt (日本でいうトレセン) を配置し U-11 から U-14 を対象に週 1 回有資格指導者による DFB の統一的な育成コンセプトに基づいてタレントのレベルアップを図っている。

また、そこで行われたトレーニングを DFB 公式サイトの DFB-TV で容易に観ることができ GK における技術の普遍性を高めていると考え、このような国としての取り組みも、ドイツ国内の GK のレベルアップに貢献しているのではないだろうか。

表 16 は、その代表例を表している。ゼップ・マイヤーは選手として 1972 年欧州選手権、1974 年ワールドカップにおいてドイツ代表 (西ドイツ代表を含む) を優勝に導いた後、ドイツ代表 GK コーチとして 1990 年ワールドカップ、1996 年欧州選手権を優勝に導いた。

また、アンドレアス・ケブケは選手として 1996 年欧州選手権を優勝に導いた後、ドイツ代表 GK コーチとして 2014 年ワールドカップ、2017 年コンフェデ杯を優勝に導いた。選手として世界大会で優勝経歴のある GK がドイツ代表 GK コーチになり、優勝に導いているということは、国際大会で優勝した経験がないと伝えられない技術や知識などがあると推察され、ロールモデルであった選手が GK コーチになり知識や技術を継承しロールモデルを作るのに役立っていると考ええる。加えて DFB は、2011 年から GK コーチライセンスを導入し、一つの基準を設け、経験だけでは補えない GK コーチに必要な知識や技術などを教育し、素晴らしい経歴を持つ GK コーチ以外の一般の GK コーチのレベルアップも図っている。2011 年以前も世界で活躍するような GK がドイツ国内から輩出されてきたが、よりそのような GK を増やすのに貢献するのではないだろうか。

このような DFB の取り組み、ロールモデルの存在、進化し続けようという考えが組み合わさり相乗効果を生みドイツ人 GK のレベルアップに貢献し、起用率に影響を与えていると考えられる。

表 16 ドイツ代表 GK の変遷と大会成績

開催年	1954	1958	1962	1966	1970	1972	1974	1976	1978	1980	1982	1984
大会名	W杯	W杯	W杯	W杯	W杯	欧州選手権	W杯	欧州選手権	W杯	欧州選手権	W杯	欧州選手権
場所	スイス	スウェーデン	チリ	イングランド	メキシコ	ベルギー	西ドイツ	ユーゴスラビア	アルゼンチン	イタリア	スペイン	フランス
順位	優勝	ベスト4	ベスト8	準優勝	3位	優勝	優勝	準優勝	2次リーグ敗退	優勝	準優勝	グループリーグ敗退
登録GK	トニー・トゥレク	フリッツ・ヘルケンラート	ハンス・ティルコフスキ	ハンス・ティルコフスキ	ゼップ・マイヤー	ゼップ・マイヤー	ゼップ・マイヤー	ゼップ・マイヤー	ゼップ・マイヤー	ハラルド・アントン・シューマツハ	ハラルド・アントン・シューマツハ	ハラルド・アントン・シューマツハ
	ハインリヒ・クヴィアトコフスキ	ハインリヒ・クヴィアトコフスキ	ヴォルフガング・ファーマン	ギュンター・ベルナルド	ホルスト・ウォルター	ヴォルフガング・クレフ	ノルベルト・ニグブル	ルドルフ・フルグス	ディーター・ブルデンスキ	アイケ・インメル	ベルント・フランケ	ディーター・ブルデンスキ
	ハインツ・クブシュ	ギュンター・サヴィツキ	ギュンター・サヴィツキ	ゼップ・マイヤー	マンフッド・マングリッツ		ヴォルフガング・クレフ		ルドルフ・カルグス		アイケ・インメル	ヘルムート・ローダー
開催年	1986	1988	1990	1992	1994	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002
大会名	W杯	欧州選手権	W杯	欧州選手権	W杯	欧州選手権	コンフェデ杯	コンフェデ杯	コンフェデ杯	欧州選手権	コンフェデ杯	W杯
場所	メキシコ	西ドイツ	イタリア	スウェーデン	アメリカ	イングランド	サウジアラビア	フランス	メキシコ	オランダ・ベルギー	出場なし	日本・韓国
順位	準優勝	ベスト4	優勝	準優勝	ベスト8	優勝	出場なし	ベスト8	グループリーグ敗退	グループリーグ敗退	出場なし	準優勝
登録GK	アントン・シューマツハ	アイケ・インメル	ボド・イルクナー	ボド・イルクナー	ボド・イルクナー	アンドレアス・ケブケ		アンドレアス・ケブケ	イエンス・レーマン	オリバー・カーン		オリバー・カーン
	ウルリッヒ・シュタイン	ボド・イルクナー	ライモンド・アウマン	アンドレアス・ケブケ	アンドレアス・ケブケ	オリバー・カーン		オリバー・カーン	ロベルト・エンケ	イエンス・レーマン		イエンス・レーマン
	アイケ・インメル		アンドレアス・ケブケ	ティモ・ヒルデブランド	オリバー・カーン	オリバー・レック		イエンス・レーマン				ハンス・ヨルク・ブット
開催年	2003	2004	2005	2006	2008	2009	2010	2012	2013	2014	2016	2017
大会名	コンフェデ杯	欧州選手権	コンフェデ杯	W杯	欧州選手権	コンフェデ杯	W杯	欧州選手権	コンフェデ杯	W杯	欧州選手権	コンフェデ杯
場所	出場なし	ポルトガル	ドイツ	ドイツ	オーストリア・スイス	南アフリカ	南アフリカ	ポーランド・ウクライナ	ブラジル	ブラジル	フランス	ロシア
順位		グループリーグ敗退	3位	3位	準優勝	出場なし	3位	ベスト4	出場なし	優勝	ベスト4	優勝
登録GK		オリバー・カーン	オリバー・カーン	オリバー・カーン	イエンス・レーマン		マヌエル・ノイアー	マヌエル・ノイアー		マヌエル・ノイアー	マヌエル・ノイアー	デア・シュテークン
		イエンス・レーマン	イエンス・レーマン	イエンス・レーマン	ロベルト・エンケ		ハンス・ヨルク・ブット	ティム・ワイゼ		ヴァイデン・フェラー	デア・シュテークン	ベルント・レノ
		ティモ・ヒルデブランド	ティモ・ヒルデブランド	ティモ・ヒルデブランド	レネ・アドラー			ロン・ロバート・ツイラー		ロン・ロバート・ツイラー	ベルント・レノ	ケビン・トラップ
					ティモ・ヒルデブランド							

第4節 その他

インタビュー結果から、芝生でサッカーをできることがドイツ国内では容易だと述べており、これは GK にとって最高の環境だと考える。実際に、筆者が芝生で毎日 GK トレーニングをできるようになったのは大学時からであり、その前は土のグラウンドで横に飛んでシュートを止めたりし、擦り傷や打撲を多く経験し、痛い思いをたくさんしてきた。

また、浦和レッズ GK 西川氏が GK を始めた時のことを以下のように述べている。

『最初はやっぱり、嫌でしたね。土のグラウンドで飛ぶと痛いし、失点したら GK のせいって言われがちだし。ゴールを取られるんじゃないくて、自分を取りたいですしね』¹

GK というポジションを始める導入部分において土のグラウンドでやることを嫌がっているということが分かる。GK を始めるという動機の部分で、芝生のグラウンドでプレーでき

¹ NumberWeb (2013/1/21) 文藝春秋, <http://number.bunshun.jp/articles/-/325623>

ることは動機の妨げにはならないこと、またインタビューからドイツの気候が足腰の強化やボール扱いの上達に貢献していると推察される。そして、GKをやりたいと思わせるような動機作りに GK トレーニングのメニューが豊富かつ楽しいメニューが多いという面も役立っていると考え。すなわち、芝生や気候といったハード面と GK のトレーニングメニューの豊富さというソフト面の両方が GK をやりたいと思える環境作りと GK 技術の向上に役立っていると考え。

第6章 結論

ブンデスリーガにおける自国籍 GK の多さや CL 優勝チームでのドイツ人 GK の起用、また筆者の経験からなぜドイツ人 GK が多く起用されているのかという疑問が生まれ、その自国籍 GK を多く起用している現状や要因を明らかにするために、欧州においてドイツ人 GK が起用されている現状やドイツ国内での実態を調査した。その結果、自国籍 GK レシオから、欧州においてドイツ人 GK が他国よりも高い割合で起用されている現状が明らかになった。その要因として、MVP の選出、ロールモデルの存在、楽しい練習メニューの豊富さで、GK をやりたいと思える環境があること、足でのシュートストップやディフェンダーの背後のスペースを埋める戦術のような従来では存在しなかった GK の技術を取り入れ進化し続けようとする試み、ドイツサッカー協会としての取り組みが合わさり、ドイツ人 GK のレベルアップに貢献し、起用率に影響を与えていると示唆された。

第7章 謝辞

本研究を行うに当たり、非常に多くの方々のお力添えや、ご協力を頂きました。厳しく且つ暖かくご指導くださった平田竹男教授に心より深く感謝致します。

また、副査の中村好男先生、論文の細部に至るまでご指導をいただいた日下部大次郎先生にも深く感謝申し上げます。また、特に修士1年次には児玉先生にも大変お世話になりました。深く感謝申し上げます。その他早稲田大学スポーツ科学研究科でご指導くださった先生方にこの場をお借りしてお礼を申し上げます。共に勉学に勤しんだ平田研究室学部ゼミの皆様、平田研究室社会人修士10期、11期、12期の皆様、2年生コースの先輩である藤井暢之、松本尚己氏、奥下諒氏、また河野遼兵氏を始めとする修士1年の皆様には大変お世話になりました。心より感謝の意を申し上げます。そして、インタビュー調査に快くご協力してくださいましたフォルトゥナ・ケルン GK コーチの落合貴嗣氏、柏レイソル GK コーチの松本拓也氏に心より深く感謝致します。

最後に、大学院生活を全面的に応援してもらい、生活面や精神面など様々な部分において支援してもらった家族に、心から感謝します。

第8章 参考文献

- 1) 平田竹男『スポーツビジネス最強の教科書』東洋経済新報社, 2017
- 2) ドイツサッカー協会, <https://www.dfb.de/sport1-strukturen/talentfoerderung/start/>
- 3) 日本サッカー協会, <http://www.jfa.jp/samuraibluemember/>
- 4) IFFHS, <https://iffhs.de/strongest-national-league-world-2016-spain-since-2010/>
- 5) Champions League, <https://www.transfermarkt.co.uk/champions-league/startseite/pokalwettbewerb/CL>
- 6) FIFA, <http://www.fifa.com/worldcup/>
- 7) UEFA, <http://www.uefa.com>
- 8) 柏レイソル HP, <http://www.reysol.co.jp>
- 9) 伊藤 博, 高沢 惇, 吉武 敦磨, 永都 久典『サッカーゴールキーパーの動作分析 : PK 時の動作時間について(その 1)』, (1979)
- 10) 三澤翼『ドイツ・ブンデスリーガにおけるユース育成に関する研究』, (2013)
- 11) 松原英輝, 入口豊, 中野尊志, 西田裕之, 中村泰介『フランスの青少年サッカー選手育成システムに関する研究(II) -国立サッカー学院(I.N.F.)の現状及び特徴-』, (2007)
- 12) 松元裕也『ゴールキーパーコーチの必要性に関する研究 -主に中学、高校年代について-』, (2011)
- 13) ブンデスリーガ. <https://www.bundesliga.com/jp/>
- 14) Oscar del Calcio, <https://ja.wikipedia.org/wiki/オスカル・デル・カルチヨ>
- 15) Fußballer des Jahres, [https://ja.wikipedia.org/wiki/年間最優秀サッカー選手賞_\(ドイツ\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/年間最優秀サッカー選手賞_(ドイツ))
- 16) Don Balón Award, <https://ja.wikipedia.org/wiki/ドン・バロン・アワード>
- 17) Trophées UNFP du football, <https://ja.wikipedia.org/wiki/トロフェ・UNFP・デュ・フットボール>

- 18) The Professional Footballers' Association Players' Player of the Year,
<https://ja.wikipedia.org/wiki/PFA> 年間最優秀選手賞